

# 流動性概念と債権流動化(8)

## － ヒュームの第五実験から見る交換 －

深 浦 厚 之

### Abstract

In this paper we extend the results of the author's last paper and examine the process through which the economic agents engage in the exchange, by considering *the transition of the ideas*. Fortunately, Hume presented us the series of the experiments to analyses the human nature on "love and hate". We focus especially on his 5th experiment and conclude that the exchange is conducted when both agents form the particular passion, i. e. , "love and hatred" in Hume's sense. This strongly supports the standard microeconomics discussions that states the exchange is the co-operative and both party can get profit.

**Keywords:** Hume's 5th experiment, liquidity, exchange, sympathy

## 1 はじめに

前論文で残された問題は「個々の取引に基づいて形成される交換という観念（連合）が，社会で共有される市場経済という観念になるのか」という点であった。すなわちある個人が交換という観念連合を持ちえたとしてもそれが複数の個人間で共有されなければ，市場経済という社会現象を論じることができないのである。換言すれば，このようにして得られた交換観念が市場経済を保持しうるに十分であるのかを確かめる必要がある。

ここで注意が必要なことは，最下位の取引観念が市場観念を限界づけるこ

とである。この意味で最下位の取引（二財の取引）は市場経済にとって不可欠な単位である。つまり市場経済において二財の取引はそれ以上の分割を許さない。換言すれば、交換は個人の利己心に基づくが、それは一人の経済行為ではなく少なくとも二人の経済主体の相互の関わりの中で行われなければならないことを意味する。これは相手を満足させることができなければ交換は成立しないという標準的な経済学の議論（契約曲線や消費コアの議論）が正しいことを支持する。

しかし、一つの疑問は利己心に支配された個々の思惟が、どのようなメカニズムによって相手に向けられるのか。たとえ相手から交換によらず収奪しようとする場合であってさえも、精神は他者の精神に向けなければならない。思惟の向う対象が観念であるから、このことは交換において個々の利己心が他者という観念を持ち、それが自分自身という観念、あるいは自己の利益という観念と何らかの規則性に基づいて関連づけられなければならないことを意味している。

本稿は前論文に引き続きヒュームの『人性論』に依拠しつつ、取引から流動性に至る観念の推移の過程を複数の経済主体の観点から再確認し、その中で交換の哲学的意義を探ることを目的とする<sup>1</sup>。

## 2 自我と他者

前論文で着目した恒常的连接はヒュームが『人性論』第一編における主題の一つ、すなわち因果関係を解明する際に用いた分析ツールである<sup>2</sup>。とこ

---

1 A Treatise of Human Nature のテキストについては Dover Philosophical Classics を利用し、引用箇所は編・部・節の数字によって示した（例：2・2・4）。なお、個々の用語の訳出にあたっては大槻春彦による翻訳（岩波文庫版、1948）も参照した。

2 恒常的连接の原型はロックに見出すことができる。『人間知性論』第四巻第16章「同意の程度について」において、彼は感官（＝経験）がその真の知識を保証しない時、類似の事象間に見られる類比からその事物間の関係に関する蓋然的な知識を得ることがある

るで第一編「知性について」(Of the Understandings)では人間の思惟の作用をそれ自体として論じており、いわば独立の(孤立した)人間、経済学の用語で言えば代表的個人が分析の対象となっている<sup>3</sup>。続く第二編「情緒について」(Of the Passions)では、代表的個人の議論が二人の人間の相互関係にあてはめられ、人間相互の感情の交流が分析される。このとき、自分自身について感じる様々な印象から得られる観念が自我(self)であり、他者についてのそれが他者(others)である。つまり、ヒュームにおいては自分自身もまた観念であり、このことが「人間とは様々な知覚の束あるいは集合」(1・4・6)という定義の基盤となっている。

このことから、第一編から第二編への展開は、思惟の作用がおよぶ空間が私的なそれから公的なそれへ拡大する過程として理解できる。しかし、公的空間は異なる個人の異なる思惟が出会う空間であるという意味で、個人の思惟から独立ではない。たとえばゲーム論でいう各プレイヤーの戦略が私的空間であり、この空間内では個人は自らの思惟にのみ従う。ラッセル(2005)の言を借りれば「混じりけのない私的な経験」に基づく。他方、複

---

と論じる。ここから、人間は可感的な現象、つまり結果を見ることはできるが、その真の原因を知ることにはできない。とはいえ、結果に対して作用する原因や結果が生み出される様式については、蓋然性を伴う確からしきで推測できるとした。ただしロックは恒常的接続は理知の範囲に入るとは考えていない。パークリは『人知原理論』において人知の世界を観念とそれを産み出す精神(観念の原型)から構成できると論じ、超越的な実体・基体の存在を否定した。このため、可感的な事物は受動的に観察されるだけであり、事物間に人知の及ばない因果関係は存在しないという主張が導かれた。ヒュームはほぼ同様の議論を行っており、複数の観念が同じような状況で同じように現出するとしてもそれは観念間の相関関係にはなりえても、因果関係を見ることはできないとした。

3 “understandings”を「知性」と訳出するのは大槻以来の慣例である。しかし、第一編で論じられるのは、我々が知覚する世界はどのように心に映るかという問題、知覚によって写し取られた像の諸性質である。知性という言葉には「あの人は知性的である」「彼には知性がある」といった用いられ方が多く、知覚する主体を指し示すことが多い。よってunderstandingsは「認識について」とするほうが第一編の議論に即しているように思われる。ただ、「認識」あるいは「知性」には既に別の英語が対応・定着しており、ここでは大槻訳によることとした。

数のプレイヤーの戦略の組み合わせから構成されるペイオフマトリックスが公的空間に対応する。よって世界は、私的思惟からなる私的空間と、それを包み込む空間から構成されることになる<sup>4</sup>。

したがって、ある個人にとっての公的空間は、他の個人にとっての私的空間であり、その意味で我々は他者の思惟を観察し経験することを通じて、公的空間を知覚する。つまり公的空間もまた可感的心的対象であり、私的空間を根拠づける実存として考えることはできない<sup>5</sup>。

これは物質と精神の二元論をとる大陸の合理主義と著しい対照をなす。二元論においては、精神によって知覚される対象、その典型が物質であるが、それは精神とは別の存在であり、両者はある接点（機会因、松果腺など）を介して時空を共有する。しかし、根本において、精神と物質の存在は異なる始原によらなければならない。この二元論は簡明である半面、人間精神の完全性を首肯できない以上、物質世界をすべて理解することはできないという限界に突き当たらずを得ず、そこから懐疑論への道をつけることになる。さらに物質世界の独立性は無神論につながるというパークリなどの批判を招いた。二元論を否定すれば、物質は精神によって知覚されるにすぎず精神と独立の存在ではないことになるのだが、いうまでもなくヒュームも同様に主張する。これらによるならば、存在観念を含めあらゆる観念は知覚にのみ還元される。人間はこの知覚の中に存在し、知覚を通して世界を知るのである<sup>6</sup>。

---

4 ラッセル(2005)はこの空間に「自分とその私的な経験以外の物」を対比させているが、この説明は限定的過ぎよう。それは複数のプレイヤーが相互に作用を及ぼしあうことで構成される空間であり、決して「私的な経験」が排除されているわけではない。むしろ私的な空間を含む空間とすべきだろう。

5 Porter(2001)によれば、ヒュームもその一翼を担う啓蒙主義思想は、思想の空間を領主と領地に限定された狭い空間から、社会全体という広い空間へと認識対象を拡大させた。この際、ポーター(2004)が述べるように個人は臣民・臣下から国民にその性格を変える。

6 「存在観念は、存在すると認識されるものの観念と等しい。何かを単純に考察することとその事物の存在を考察することは何ら異ならない。存在観念は対象たる事物の観念

### 3 情緒について

#### 3 - 1 観念と印象の二重関係

世界には自分以外の他者が含まれる。我々は自分が持つ観念と他者が持つ観念の類似によって自我以外の他者を知ることができ、それは自己に反映されて自分自身の精神の存在を自らに教える。したがって人間が社会的である時、自分自身に向けられる思惟と（それには他者から輻射された結果としての自分自身も含まれる）、他者に向けられる思惟は常に交錯することになる。本節ではこうした状況での思惟の作用を『人性論』第二編の議論を中心に整理する。

ヒュームは情緒を次のように説明する。知覚は印象と観念からなり、印象はさらに原生的な印象（感覚的印象）と二次的な印象（内省の印象）に分けられる。今、問題となるのは後者であり、それは観察に基づく直接的な印象が作り出した観念に対して抱く印象である。また知覚が自分自身を対象とする時、そこから得られる観念が自我である<sup>7</sup>。ところで「(心の)自然な性向と合致する(印象は)は、どのようなものでも、…快 (pleasure) が感知される」(1・4・2)。そして快 (pleasure) が自我と関連する時に産み出される感覚 (sensation) が自負 (pride) である。逆の場合には苦 (pain) から産みだされ、そこから自卑 (humiliation) である。このようにして形成されるのが情緒 (passions) である<sup>8</sup>。

---

に連接されるものではあっても、それに何かを付加することはない。すべての思われるものは存在する」(1・2・6)。最後の文章は「存在するとは知覚されることである」というパークリの宣言を想起させる。実際、視覚と知覚に関するヒュームの議論(2・2・8)はパークリのそれとほぼ等しい。

7 自我が観念であるという議論は、人間を知覚の束とするテーゼを基礎づけており、ヒュームの体系の根幹をなす。この点においてヒュームはロックと著しい対照を示す。後者にとっては思考する存在である自我は神により(啓示により)与えられる。この点では知覚の座としての精神を強調するパークリも同様である。

8 快苦は精神的なものだけを意味し、肉体的快苦 (bodily pain and pleasure) は除外され

たとえば美しく着飾った自分を鏡で見るとしよう。このとき「自分は美しい」という感官 (= 印象) が心地よいもの(快)であれば、それは自我 (= 観念) に投影され自負 (= 情緒) となる。あるいは、「美しい服の所有者」という自我に向かう観念が快をもたらすなら同様に自負となる。醜い姿から意気消沈する時は自卑となる。したがって、「自我が考慮に加えられない限り、自負や自卑 (といった情緒) が生じることはない」(2・1・2)。自我は情緒の原因ではなく、情緒が喚起された時に視線が向けられる対象であることになる。すなわち、「情緒の原因は対象とは区別されなければならない」(2.1.2)、よって情緒の原因は自我とは独立であることが直ちに導かれる。

内省の印象が自己以外に振り向けられる時の対象が他者であり、他者に対する昂然に対応するのが愛情 (love)、意気消沈に対応するのが憎悪 (hate) である。この結果、ある原因に対して(1)快( $r$ )・苦( $s$ )、(2)自我( $m$ )・他者( $n$ )、に応じて4通りの情緒、すなわち、自負( $p$ )・自卑( $h$ )・愛情( $l$ )・憎悪( $ha$ )、が得られるという「観念と印象の二重関係」(double relation)と呼ばれる関係が樹立される。いうまでもなく自我・他者が観念、快・苦が印象である(図1)°。

この二重関係は、人間の心情 (= 情緒) が観念と印象のいずれかだけに偏って形成されるのではないことを意味する。つまり、いずれか一方に依存する「二つの極端の不便さを慎重に回避するかのように事態が自然に進む」(1・3・10)のである。印象だけが人性を支配すれば、我々は常に快苦のみに曝さ

---

る。ヒュームによれば後者は自然的物理的原因によるものであり、精神活動である情緒とは別種と考えられるからである。また情緒には直接 (direct) 情緒と間接 (indirect) 情緒がある。前者は善悪や快苦から直接生じる欲望・嫌悪・悲哀等であり、他の要素と関連して生じる間接情緒が以下の考察の対象となる(2・1・1)。ただし、ヒュームは「心は不快からの救済を求める」(1・4・2)と述べ、不快はそこに留まることのない感覚とする。当然、不快の後にどのような状況が生じてくるかが問題となる。この点を考慮した大槻の訳書では、不快の後に括弧書きで「ないしは不安定感」と付記されている。

- 9 自我を知覚の主体、あるいは独立の実体として定義すればこうした二重関係を確立することはできない。

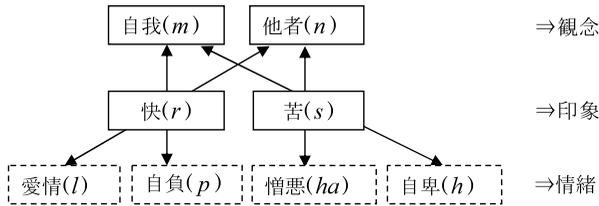


図1 観念と印象の二重関係

れて生きることになる(「我々が感じる快・苦以上に真実であるもの、関心を持たせるものはない」(3・1・1))。実際、苦しみに我を忘れるときには、苦の原因事象を除去・回避しようというより高度な精神活動に容易に移行できない。我々は自分自身を他者と相対づけて観念化することができるが故に、原生的な快苦に振り回されることなく愛情(*l*)から憎悪(*ha*)に至る種々の情緒を得ることができ、生き方に彩りを添えることが可能となるのである<sup>10</sup>。

さて、情緒の構造は二章第二節で展開される8つの思考実験および二章第九節で論じられる共感に関する議論を通じて詳細に検討される<sup>11</sup>。本節ではまず8つの思考実験を順次検討する<sup>12</sup>。

まず、二重関係を次のような式で表す(記号は上述の通り)。

$$\begin{pmatrix} p & l \\ h & ha \end{pmatrix} \begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} (r \ s) = \begin{pmatrix} pm + ln \\ hm + han \end{pmatrix} (r \ s) = \begin{bmatrix} r(pm + ln) \\ s(hm + han) \end{bmatrix} \dots\dots\dots(1)$$

10 観念と印象の二重関係には先行する類似の議論がある。ロック『人間知性論』第二部第20章「快苦について」および「力能について」はその一例である。彼は「快苦を巡って人間の様々な情緒が生じ」、その際「事物が自己の内部に生まれる快い内省をもたらす時、愛情という観念」が生じると論じる。自我と他者の区分、快苦と幸福・不幸の関係がヒュームほど明確でないが、基本的に同じ方向軸に沿った議論であるといえよう。

11 たとえば、愛情と自卑は尊敬 (respect) を、憎悪と自負は侮蔑 (contempt) を導く(2・1・10)。

12 この二重関係と因果関係(つまり観念の恒常的连接)の関係は次のとおり。恒常的连接は印象の継起と観念の継起が平行して生じることであり、したがって印象と観念をそれぞれ並列した関係(印象 印象 …, 観念 観念 …)である。情緒はある印象とそれに対応する観念の組み合わせによるものである。また、観念の継起を時間と定義すれば、このことは同時に情緒の継起も時間と対比できる可能性があることを意味する。

左辺冒頭の行列を情緒行列、二番目を自我他者ベクトル、三番目を快不快ベクトルと名付けておこう。なお、ヒュームは以下の実験において五つの仮定を置いている(2・1・6)。そのうち第一・第二の仮定により自我他者ベクトルと快不快ベクトルは別個に定義されることになる。「快不快をもたらず対象は明晰判明に識別される」という第三の仮定は快不快ベクトルの要素が特定可能であることを要請するが、これは  $r, s$  はそれぞれ 1 か 0 のいずれかの値をとることとして担保される、同時に情緒の原因が恒常的であり観察可能であるという第四の仮定にも対応する。さらに、こうした定式化を行うことは、情緒形成が一定の規則性のもとになされることを含意するものであり、これは「一般的な規則(である習慣)が...情緒に影響を与える」という第五の仮定に対応する。

以上のことから、自我が快と結合する時、(1)は、

$$\begin{pmatrix} p & l \\ h & ha \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} (1 \ 0) = \begin{pmatrix} \hat{p} \\ h \end{pmatrix} (1 \ 0) = \begin{pmatrix} \hat{p} \\ 0 \end{pmatrix} \dots\dots\dots(2)$$

となり、自負( $p$ )が帰結する<sup>13</sup>。以下ではルーシー(自我)とジョージ(他者)の情緒を(1)を用いて表現し、その特性を検討する。なお、以下では帰結する情緒を表す時には[ ]で示す。

#### 第一実験：ルーシーが誰のものでもないただの部屋を見る

快も苦もなく、また、自我も他者もない。つまり、 $\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$  かつ  $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$

であるから  $= \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ 。ここでは「だれのものでもない」ため自我に対しても

13 数式上は自我・他者 快・苦 情緒という流れになる。ただし、ヒュームは快・苦が先行する可能性にも言及している。しかし、この相違は(1)においてもベクトルの順序を入れ替えれば表示できる。重要なのは情緒は観念と印象の組み合わせで起こること、そして観念と印象は別個に作用するという点である。なお、観念と印象の二重関係についての明快な解説は Schmitter(2010)、古賀(1999)を参照のこと。ただし、前者のほうがヒュームの原文に忠実である。

他者に対しても作用する原因となりえないこと、そして「ただの部屋」(美しくも汚くもない)であるため快も苦も産み出さず、よって何の情緒も帰結しない。たとえその部屋が美しい部屋であろうと「単に美しいと考えられるにすぎず、我々と関連のある事物でなければ、美は自負や自卑を産まない。」(2.1.2)。

第二実験：ルーシーが、自分かジョージのいずれかの所有物である部屋を見る

部屋がルーシーのものであれば  $\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  , ジョージのものなら  $\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  である。部屋が美しい場合には  $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  , そうでなければ  $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  である。

帰結はこれらの組み合わせにより、ルーシーの部屋の場合には、  $\begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix}$  も

しくは  $\begin{bmatrix} 0 \\ h \end{bmatrix}$  , ジョージの場合は  $\begin{bmatrix} 0 \\ l \end{bmatrix}$  もしくは  $\begin{bmatrix} 0 \\ ha \end{bmatrix}$  となる。部屋

の美醜が同じ確率で生じるとすれば、どちらの部屋の場合であっても、相対立する情緒が同じ程度に生じるから、相互に打ち消しあうことになり情緒は生じない。ここからヒュームは快苦も起こさないような些細な事物は何の特別な情緒も起こさないと結論した。このことは情緒の形成においては自我・他者以上に快・苦の作用が重要であることを意味しており、ヒュームが持つ功利主義的な一面が強く反映されている。これは後の第四・第五・第六実験においてさらに明確になる。

ところで、「相互に打ち消しあうことになり情緒は生じない」と言えるためには、快と苦が加法的に演算可能でなければならない。言い換えれば、はじめから何も感じない場合を表す第一実験と相殺によって結果的に情緒が生じないことを区別したところにも、ヒュームの功利主義的側面が見え隠れし

ている。

第三実験：ルーシー，ジョージいずれのものでもない眺めのよい部屋を見る

「ルーシー，ジョージいずれのものでもない」の意味に注意が必要である。ヒュームは二人が展覧会で美しい石を見る場合を想定している。この場合，両者に関わりがないというよりは，二人が共通の経験をしていると表現した

ほうが適切だろう。いずれにしるこの場合には  $\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ ， $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  であるから， $= \begin{bmatrix} p+l \\ 0 \end{bmatrix}$  となる。眺めが悪い場合は  $= \begin{bmatrix} 0 \\ h+ha \end{bmatrix}$  である。

ここでは，第二実験のように二つの情緒が相殺されることはない。

しかし自我・他者への情緒が混在するため，ある特定の方向性を持った情緒とはならない。つまり，「心的傾向にある趨勢を与える」が「確立された情緒とはいえ単に昂揚した性向があふれ出た」にすぎないから，「我々に帰属しないもの・関連のないすべてのものはいかに非凡な性質を帯びていたとしても，またいかに大きな驚嘆・賞賛を自然に引き起こすとして，我々の自負心に何の影響も及ぼさない」(2・1・9)ということになる。この帰結は第二実験と対立するように見えるが，快・苦が端緒となってある心的傾向が生まれるという点は共通している。第二実験ではそれらが同じ方法に向かうことで快苦が相殺されるが，第三実験では向かう先が異なるため効果を確定できないのである。

ここまでの実験により，自我・他者と快・苦とは独立のある原因に端を発した原因が観念の二重結合を通じて情緒を産み出すメカニズムの基本的な構造が示された。第四実験以降はいくつかの発展型を取り扱う。

第四実験：ルーシーが老婦人を献身的に世話する

これは自分の行為であり  $\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  ,ルーシー自身が他者(老婦人)の満足を高めることに喜びを感じれば,  $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  から  $= \begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix}$  となり, 自負を得る。逆にこうした行為によって自分が苦になるなら  $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  だから,  $= \begin{bmatrix} 0 \\ h \end{bmatrix}$  となる。もし他者が同様の行為をなしているのを見るなら,  $\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  であり  $= \begin{bmatrix} l \\ 0 \end{bmatrix}$  あるいは稀に  $= \begin{bmatrix} 0 \\ ha \end{bmatrix}$  となる。

第四実験はヒュームによる徳(virtue)と悪徳(evil)の議論に密接に関わっている。形而上学が哲学思想の主流であった17世紀中葉までは、徳は人間にとっての外的な存在によって与えられるものであった。それは中世神学(スコラ哲学を含めてもよいだろう)においては神であり啓示によった。ここでは人間は受動的である。しかし、徳をこのように考えれば悪徳もまた神や啓示の業ということになり、完全なる存在として神の正当性に疑問符がつく。理神論は神と自然を同一視することで(言い換えれば神を人間により近いところに引き寄せることで)この問題を解決しようとする。徳もまた自然の営みに合致する人間の行為として捉えられる。しかし、自然が徳の基準となるという意味では人間は自然から徳を知らされるにとどまり、その意味で受動的であった(これが道徳感覚(moral sense)である)。ところが行為が自然と波長を合わせるとき人間はそこに快を感じるという認識から、理神論は功利主義への道を拓いていった。ここでは、所与の自然の営みに対して人間が主観的にどう感じるのかが問われることになる。つまり、自然そしてその背後に意識されていた絶対的存在は人間の思惟の客体に格下げされてしまう。ヒュームに代表される道徳感情(moral sentiment)はこうして人性の主体性をもって、形而上的世界を否定するに至るのである。(1)において快

不快ベクトルは明示的に示されていることが、これらの議論が道徳感覚ではなく、道徳感情に依拠することを端的に示している。先の引用にもあるように、自然がどれほど荘厳・非凡・壮大であっても、それが自我に関わらない限り情緒を生まない。情緒も生まない以上、自然の荘厳さから神やその他の絶対的存在を感じる必然性はない。

一般に、お年寄りや弱者に親切にすべきと言われているが、そうした行為は自負につながる行為であると言えるものの、それが有徳であるとか、(世俗的な意味で)道徳的あるとは言えないことを、この第四実験は意味している。ではヒュームにとって道徳とは何か。これは第三篇において特に社会との関連で詳しく論じられる<sup>14</sup>。

#### 第五実験：ジョージが有徳な行為を行う

第四実験で示した通り、ジョージは他者だから  $= \begin{bmatrix} l \\ 0 \end{bmatrix}$  となる。したがって、ルーシーは有徳な行為を行うジョージに愛情を抱く。

ここからヒュームの議論は独特の展開を見せる。ジョージは他者だが自分と深い繋がりがある。このためジョージの有徳な行為を見たルーシーは彼に対する愛情を抱く。同時にそれはルーシー自身の自負を引き起こす。このように  $= \begin{bmatrix} l \\ 0 \end{bmatrix}$  から  $= \begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix}$  へ、つまり他者と自我の間で生じる情緒の転移をヒュームは送致 (carry) と呼ぶ。いうまでもなく、送致は自我・他者が観念であるから可能なのであり、もし自我が経験や可感的事象ではなく何らかの存在によって外生的に与えられるものであれば、こうした相対化は生じず、よって観念間の推移である送致も起こらない。

14 この点を重視した Rorty (1993) は、『人性論』の構造について第二編の議論の上に第一編の議論を位置づけ、情緒の基本的機能が解明される第二編こそが『人性論』の基礎をなし、道徳感情の基礎を形作ると主張する。

同様に、他者が悪徳な行為におよぶ時には、 $= \begin{bmatrix} 0 \\ ha \end{bmatrix}$  から  $= \begin{bmatrix} 0 \\ h \end{bmatrix}$  へ送致  
 が起こる。形式的に表現すれば、 $\begin{pmatrix} p & l \\ h & ha \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} (1 \ 0) = \begin{pmatrix} l \\ ha \end{pmatrix} (1 \ 0) = \begin{bmatrix} l \\ 0 \end{bmatrix}$  にお  
 いて、 $\begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  を  $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  を置き換えることに対応する<sup>15</sup>。

図2を見よ。初めに他者(n) 快(r) 愛情(l)という第一の二重関係が生  
 じる。ここで自我への観念の移動が生じ、他方、有徳な行為から得られる快  
 が不変であれば、自我(m) 快(r) 自負(p)という第二の二重関係によって、  
 情緒が送致される。したがって送致前においても送致後においても、作用す  
 る原理は観念と印象の二重関係だけであり、その経路が変化するのである。

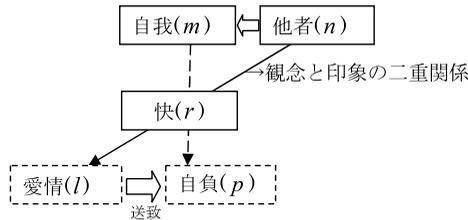


図2 送 致

15 もし快・不快があるウェイトとしてあらわされるとすれば送致の過程はより複雑にな  
 るだろう。このときには0要素がなくなるので  $= \begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix}$  ,  $= \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix}$  といった単純な形には  
 ならない。言い換えれば、同じ人の中に異なる複数の情緒が形成されることになる。こ  
 の問題についてヒュームはより強い(violent)情緒が弱い(calm)情緒と「混在し一休  
 化する」(2・3・4)と論じる。また、快・不快の原因と自分との関係の強度に応じて形成さ  
 れる情緒にも比例的に強度の相違が生じる可能性もある。「自分自身になじみのある快は  
 どのようなものでも、たとえ快の程度が強くともその性格を全く無視できるような快に  
 比べてより強く影響を与える」(2・3・6)。強度の相違が生じる可能性の一つが意図の作用  
 である。「意図・は、行動の後も残留し、行動と人を結びつけ、したがって、一方から他  
 方への観念の推移を容易にする」(2・1・3)。自我・他者は観念であるから混在はできない。

このように、「有徳な他者」という他者への情緒が「有徳なジョージの関係者である自分」という自我への情緒に転移することが送致を引き起こすのだが、ここではジョージはルーシーの知己の人物であるという「仮定に基づき、観念の関係を(ルーシー)自身と持つ」(1・2・2)ことが決定的に重要である。つまり、送致のメカニズムにとって重要なのは他者観念から自我観念への推移なのである。他者から自我への推移の結果、快を支点とする挺子のように情緒の送致が生じる。しかし、これはジョージがルーシーにとって近い関係にあるから生じるのであり、見ず知らずの人であればこうした現象は起こらない。「もっとも強い関心は自分自身に、次の関心は親族や友人に向けられ、見知らぬ人その他の人への関心はもっとも弱くなるという枠組み(=偏頗(partiality))が我々の心の中にある。」(3・2・2)<sup>16</sup>。

第六実験(第八実験を含む): ルーシー自身が有徳な行為をする。

第六実験は第五実験と逆のケースである。つまり、自分自身が有徳である時、それは  $= \begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix}$  となるが、これが自分と関連のある他者を愛する気持ち、つまり  $= \begin{bmatrix} l \\ 0 \end{bmatrix}$  に送致されるかどうかを問う。第五実験を機械的に当てはめれば送致される。しかしヒュームはここで経験的に考える必要性を強調する。自分自身の行為に関して自負心を持つ場合に、そのことが他者を愛する動機になりうるのだろうか。そのようなことは極めて稀であろう。そうだとすれば、二つの情緒の送致(愛情( $l$ )から自負( $p$ ), 自負( $p$ )から愛情( $l$ ))は非対称である。なぜなら、「我々はどのような時においても自分自身や自分自身の心情や情緒を強く(familiar)意識している」からであり、自我に関する観念が顕れる時には「我々の注意をひき寄せて関心を他者へ移さない」(2・2

16 「自我」「他者」と快・不快との密接な関連性は Lecardaro(2002) によって改めて指摘されている。

・2)からである。

第五実験で生じた送致は、穏やかな感情から強い感情への送致であった。つまり、他者（息子）と自分を比べてみた時、他者への感情のほうが自分への感情よりも穏やかであり、それがより強い情緒に進化するのである。逆に第六実験ではすでに自我に関する強い情緒が形成されているため、それが他者への穏やかな情緒に送致されることは少ない。

しかし、第六実験には例外がありそれが第八実験で考察されている。そこでは自分の有徳な行為に対する他者の賞賛を取り上げている。この場合は「友人に賞賛される私」、すなわち  $\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  かつ  $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  から得られる  $= \begin{pmatrix} p \\ 0 \end{pmatrix}$  が起点となるが、ここで「自分を賞賛する他者」に情緒が送致されると、 $\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  に入れ替わり  $= \begin{pmatrix} l \\ 0 \end{pmatrix}$  になるのである。我々はしばしば自分を持ち上げ褒めたたえる人に好意を寄せる。そうした情緒を取り扱うのが第八実験である<sup>17</sup>。

#### 第七実験：ジョージと彼の友人が有徳な行為を行う

第七実験では第五実験がより詳細に検討される。近しい関係にある他者の有徳な行為は愛情から自負への送致を引き起こすが、他者との距離に応じてその強度が異なるというのが第七実験の主題である。先述のように、送致は穏やかな感情から強い感情へ起こりやすい。ジョージと友人が同じ行為を行っても前者のほうがルーシーに近いから、ルーシーに自負を芽生えさせるのはジョージである。「自負の程度は、対象の性質の増減に依存して増減するだけでなく、関係が遠いか近いかによっても増減する」(2・1・9)。

17 もし送致を他者から自我への移行と定義すれば第六実験は逆送致を論じているということもできる。

以上が『人性論』で検討された実験のすべてである。一見したところ、種々のケースがランダムに取り上げられているが、これらの8つの実験で観念の二重結合から生じうるすべての情緒がすべて網羅されているのである。

表1を見よ。この表は自我と他者、快と苦のすべての組み合わせに関して(1)にしたがって生成される情緒を一覧表にしたものである。あわせて8つの実験のどれに対応しているかが記入されている( , ... , ただし第四実験のみ と[4]に区別)。

まず、自我・他者、快・苦に関わりがない場合、言い換えればそれらの観念を引き起こす原因がない場合が第一実験で扱われているが、これは  $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$  あるいは  $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  の場合である。第二実験は自我と他者の区分がない場合、第三実験は快と苦の区分がない場合である。第四実験はそれらの区分

| 快・苦<br>自我・他者  | $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ | $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ | $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ | $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ |
|---|---|---|---|---|
| $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$ | $= \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix}$                                      |
| $\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ | $= \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix}$                                      | $= \begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix}$                                      | $= \begin{bmatrix} 0 \\ h \end{bmatrix}$                                      | $= \begin{bmatrix} p \\ h \end{bmatrix}$                                      |
| $\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ | $= \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix}$                                      | $= \begin{bmatrix} l \\ 0 \end{bmatrix}$ [4]                                  | $= \begin{bmatrix} 0 \\ ha \end{bmatrix}$ [4]                                 | $= \begin{bmatrix} l \\ h \end{bmatrix}$                                      |
| $\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ | $= \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix}$                                      | $= \begin{bmatrix} p+l \\ 0 \end{bmatrix}$                                    | $= \begin{bmatrix} 0 \\ h+ha \end{bmatrix}$                                   | $= \begin{bmatrix} p+l \\ h+ha \end{bmatrix}$                                 |

表1 実験結果の一覧

が明瞭な場合であり、『人性論』本編では説明が省略されているが、あわせて4つのパターンがある。送致を論じた第五実験・第七実験は[4]からへの送致、送致が生じない第六実験は から[4]への移動に関する議論である。そして例外的に起こる から[4]への移行が第八実験で扱われる。

この表からわかるように、ヒュームが直接言及していないのは右列最下段

$$= \begin{bmatrix} p+l \\ h+ha \end{bmatrix} \text{ の場合だけであるが、これは第二・第三実験から含意を汲み取る}$$

ことができる。第三実験が述べるように  $p+l$  と  $h+ha$  はそれぞれ不安定であるが、第二実験が主張するように自負( $p$ )と自卑( $h$ )あるいは愛情( $l$ )・憎悪( $ha$ )が相殺するならば、それらを足し合わせた  $p+l$  と  $h+ha$  にも相殺の効果が働く可能性がある。相殺の効果と和の効果のいずれが強いかはア prioriに決められないが、いずれにしても結果として生じる情緒は弱いものになる。

このように実験を整理すると、第一実験に続き、第二実験、第三実験も特に注目して議論をしなくてはならない要素はない。残る第四実験から第八実験が問題になるが、このうち第六実験は第四実験の逆である。また、第七実験は第五実験に含まれ、第八実験は第六実験の例外である。この結果、第四実験と第五実験が残されるが、第四実験は第五実験のための準備を提供している。ということは、第五実験（およびその前提を準備する第四実験）がヒュームの体系の基本となる実験であるとの帰結を得ることができる(表中、枠部分)<sup>18</sup>。

18 効用関数の連続性を基に考えれば快・不快は明快到[1,0]に分化できない(2・2・6)。こ

のときはたとえば第二実験の結果  $= \begin{bmatrix} p \\ h \end{bmatrix}$  が  $= \begin{bmatrix} kp \\ (1-k)h \end{bmatrix}$  となり( $k$ は快と不快の比率),

表1の第2, 3列の情報は一般形として最右列に集約される。ただ、ヒュームは自負・自卑は「単純斉一な印象」(2・1・2)としており両者の中間的状況を議論の対象外とした(「一人の人間が自負と同時に自卑できない」)。同様に自我と他者も[1,0]構造が仮定されておりしたがって送致は不連続に生じる。しかし「優れた息子の父親である私」と

### 3 - 2 同類方向の原理

送致と並んで、ヒュームの情緒論を支えるのが共感 (Sympathy) の議論であり、そのメカニズムは同類方向の原理 (principle of a parallel direction) として考察される。

共感とは「他者の心理的傾向や感情をコミュニケーションを通じて受け取ること」(2・2・11)である。幸福な他者を眺める自分を考えよう。このとき観念と印象と二重関係によって他者( $n$ )から快( $r$ )を経て愛情( $l$ )に至る情緒が形成される。さて、幸福な他者は当然、幸福になりたいという欲望を持っている。ここで他者の欲望の傾向(幸福になりたいとの他者の心理的傾向)と自分の欲望の傾向(幸福になってもらいたいという自分の心理的傾向)が一致する時、つまり、他者に心理的傾向を受け取る共感の作用が働く時に新たな情緒が形成される。これが仁愛 (benevolence) と呼ばれる。

図3を見よ。初めに裕福な他者を見て自分自身が快( $r$ )を感じる結果、愛情( $l$ )が生起する。「裕福さはその所有者に満足を与え、観察者は想像によってその満足を感じ、もとの(所有者が持った)印象と類似した観念を持つ。」(2・2・5)。さて、ここで他者に裕福になってほしい気持ちが自分自身に生じたとしよう。そうすると他者の裕福さはそれ自体として快であると同時に、他者の裕福を望むという自分自身の欲求を満たしているという意味でも心地よい。この種の快を $\bar{r}$ と書こう。よって、裕福な他者から得る印象は自我に転送され、自我と快( $\bar{r}$ )に基づく新たな情緒、すなわち仁愛が産み出される。これが共感であり、このときの精神の働きは二重関係と並行する経路である同類方向の原理 (principle of a parallel direction) に従っている。逆に、他

---

「有能な私」は双方とも自負をもたらすもの、前者の場合、「息子の父親」という観念が媒介になっている。むろん「父」観念は「私」観念の原因とはなりえないが(観念は何も生まない)、「父」観念が父親であるという過去の経験から「私」観念を示唆するという心の働きがある。とすれば示唆されて「私」観念に至るまでの間は自我と他者が併存しているということが出来るかもしれない。この状況を送致として考えれば、自我観念と他者観念が入れ替わり立ち替わり生じていると考えることもできる。

者が不幸である時、二重関係からは憎悪が得られるが、共感による同類方向原理からは（他者の不幸を嘆く自分自身の怒りである）憤怒（anger）が帰結する。よって、快( $r$ )から快( $\bar{r}$ )への移行が起こらない程度に「共感が弱い時は...（二重関係によって）愛情が生じ、共感が強い時には仁愛となる」（2・2・9）<sup>19</sup>。

ただし、印象の移行（快( $r$ )から快( $\bar{r}$ )への移行）・情緒の移行（愛情から仁愛への移行）と、観念の移行を区別しておく必要がある。観念は合同したり分離されたりすることはないが、「印象あるいは情緒は完全に合同可能である。つまり色のように完全に混合できる」（2・2・6）。これは図3における二種の快が自我と他者の相違にもかかわらず一体化すること、それに連動して他者の幸福を好ましく思う仁愛が形成されることに繋がっている。同じ情緒でも一つの対象からの「自負と自卑を同時に感じられない」（2・1・2）が、愛情と仁愛は同時に感じられるのであり、ここに自負・自卑と愛情・仁愛の違い、そしてその違いをもたらす共感（あるいは同類方向の原理）の重要性を読み取ることができる<sup>20</sup>。

共感と送致の違いは図2と図3の対比から明らかである。送致では他者から自我への移行が生じ、快を支点とする挺子のように愛情が帰結する。図形的には当初の二重関係が回転移動している。共感では他者の快が自我の快に移行することで、二重関係が平行移動し同類方向原理に転化するのである。つまり、愛情とは他人が裕福であるという事実それ自体が快であることによ

19 「われわれの心は他人の情緒自体を即座に発見するわけではない」（3・3・1）。しかしその情緒が引き起こされた原因である事物や現象、そしてその情緒に基づいて他人が見せる表情や行動といった結果は知ることができる。そして「それらの原因と結果から他人の情緒を推測する。そしてこの推測から共感が起こるのである」（3・3・1）。つまり、他者の行為や原因事象が媒体となって他者から自我への情緒の伝染が生じるのである。こうした行為をヒュームは表象（sign）と呼ぶ。

20 図3において他者+不快=憎悪を起点として（自我への）共感により生じる情緒、つまり「憎悪する人物が不幸になることを欲する気持ち」（2・2・6）は憤怒である（憎悪 憤怒）。さらに、憤怒から「憎悪する人物が不幸になる喜び」（2.2.7）である邪意（malice）が生まれる。

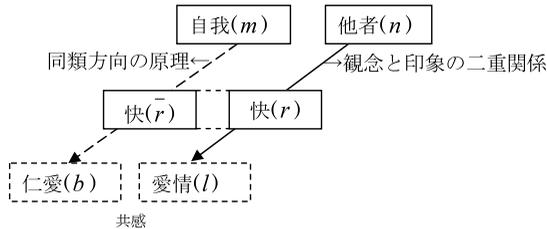


図3 共感と同類方向の原理

る情緒である。他方、仁愛は他者が裕福であることを望む自分自身の気持ちに照らして快であることの結果である。

これに伴い共感と送致では、快の原因主体と情緒の対象主体が逆転する。送致において、快の原因主体はジョージ、情緒（自負）の対象主体はルーシーである。共感の場合、快の原因主体はルーシー自身に移動し（ジョージの有徳さが彼女にとって快である）、情緒（仁愛）の対象はジョージである。いわば送致は他者の心理的傾向を自分の心理的傾向に合わせていく心の作用、共感是他者の心理的傾向に自分の心理的傾向を合わせていく心の作用といってもよいだろう<sup>21</sup>。なお、第八実験の場合、快の原因主体は自分（他者に称賛される自分）であり、情緒の対象は（自分を称賛する）他者だから、この限りにおいて共感と等しい。しかし快の主体の入れ替えは生じない<sup>22</sup>。

21 この点に関して「他人の心理的傾向や感情をコミュニケーション通じて受け取ること」という共感の定義は若干の注意が必要である。この文章をそのまま読めば、自分の情緒の側に他人に心理的傾向を取り込む、つまり、自分の情緒が基盤となっているように見える。しかし、ヒュームはこの定義の直後に、共感においては「友人や日常的につき合う人たちの理性や心理的傾向に反対してまで、自分の理性・心情に従うことは難しい」と述べ、明らかに自分の心情を他人の心情に合わせていく傾向を指摘する。

22 ヒュームにおいて、快苦から生じる共感が重要な役割を演じるのは後に正義（justice）に拡張され、彼の議論が公的な空間へと拡大する契機となるからである。ここで問題となるのはスミスにおける共感とヒュームにおける共感の関係である。これについてはスミスが共感を基礎とするのに対し、ヒュームは（共感の基となる）効用に機軸を持つという相違に着目する議論と、両者の共通性を強調する議論に大別される（島内(2005)）。しかし、本稿のように共感と交換過程を関連づけることができるとすれば、ヒュームとスミスの連続性を主張できよう。

以上の結果をまとめたのが表1である。ここからもわかるように、共感と二重関係は快の原因主体が入れ替わる以外は等しい。また、第五実験と第八実験は対照的である。第八実験と共感は情緒の対象は共通だが、後者では原因主体と情緒の双方で移動が生じる。

|            | 快の原因主体  | 形成される情緒 | 情緒の対象 |
|------------|---------|---------|-------|
| 二重関係(第四実験) | 他 者     | 愛 情     | 他 者   |
| 送致(第五実験)   | 他 者     | (愛情) 自負 | 自 分   |
| 送致(第八実験)   | 自 分     | (自負) 愛情 | 他 者   |
| 共 感        | (他者) 自分 | (愛情) 仁愛 | 他 者   |

表1 情緒の比較

以上のことを形式的に見てみよう。送致では自我他者ベクトルが  $\begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  から  $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  に変わり、これによって情緒の対象がジョージからルーシーに置き換えられる。つまり、

$$\begin{pmatrix} p & l \\ h & ha \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} (1 \ 0) = \begin{bmatrix} l \\ 0 \end{bmatrix} \text{ から } \begin{pmatrix} p & l \\ h & ha \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} (1 \ 0) = \begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix} \dots\dots\dots(3)$$

である。

共感の場合は、情緒の対象と快の原因主体の双方が入れ替わる。まず前者の入れ替えにより、自我他者ベクトルが変わる。ここまでは(3)と変わらない。つまり、

$$\begin{pmatrix} p & l \\ h & ha \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} (1 \ 0) = \begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix} \dots\dots\dots(4)$$

次に、このようにして得られた自負を他者の快不快によって再評価するのが共感である。ここで(自分から見た)他者の快不快を  $(\bar{r} \ \bar{s})$  と書くことにしよう。すると(4)は、

$$\begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix} (\bar{r} \ \bar{s}) = \begin{bmatrix} p\bar{r} \\ 0 \end{bmatrix} \dots\dots\dots(5)$$

と書くことができる。ここから仁愛( $b$ )とは他者の快をよりどころとして得られた自負の一種と定義できる。ここにも「精神の純粹な情動である自負」(2・2・6)と仁愛の相違がある。愛情( $l$ )には「それら自身の中で完結されるものではなく...心をさらなる何かへと送致する」(2・2・6)という特性が備わっており、そのことが共感のもう一つの側面を表している。

(3)から(5)への展開から共感の構造に関して重要な含意を得る。すなわち、送致は共感をその構造内に含むこと、別言すれば、共感を送致の特殊ケースであるということである。改めて図3を見よ。自我と他者は混ざり合うことはできないから、媒体の作用を介して思惟が移動する(注18参照)。しかし、二種類の快( $\bar{r}$ と $r$ )は混ざり合う。このため図3では $\bar{r}$ と $r$ を点線で結んでいる。もし、 $\bar{r}$ と $r$ が完全に混合されれば、図3は図2に帰着する。逆に、図2の快を二つに分割すれば図3が得られることも明らかである。つまり、共感是他者から自我への移行である送致と、快の分割という二つの動きの総合としてこれを理解することができるのであり、これが(3)から(5)への展開の含意である。

#### 4 消費における情緒形成

(1)と表1の結果を用いて、消費および交換における情緒の形成過程を考えよう。ヒュームの議論はある個人を中心に置いて展開されており、それゆえ特定の個人の自律的行為としての消費の分析に応用できる可能性がある。それに対して交換は交渉相手を含む関係として記述される。同時に表1に明らかのように、自我と他者の双方を含むヒュームの実験結果は、これらを手掛かりとして交換のような個人の相互関係における情緒の役割を考える契機となろう。本節ではまず消費を考察し、消費主体がどのような情緒形成を行うかを解明する。そして複数の消費主体が併存する状況としての交換に議論を拡張していく。

個人が財を消費する場合、その財は自分の所有する財でなければならない<sup>23</sup>。また、消費する以上、当該の財は自分に効用をもたらすものでなくてはならない。したがって所有から自我が、そして消費は快を付与する。これは第四実験に相当し、

$$\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} \text{ かつ } \begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} \text{ から } = \begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix} \dots\dots\dots (6)$$

という情緒形成過程が得られる。

サービス消費の場合はサービスの提供者をどのように考えるかに依存して議論の流れが変わる。サービスの提供者の存在をほとんど無視できる場合、言い換えれば、提供されたサービスだけに思念が向けられる場合、所有する財の消費と事実上区別がないから、(6)と同様に  $= \begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix}$  となる。

しかし我々はサービスの提供者にも思念を向ける傾向を持つ。ヒュームが第八実験において例を挙げている主人と召使の関係を考えてみよう。召使が供給するサービスだけに主人の意識が向かう場合は、財の消費と本質的に変わらない。しかし、サービス主体である召使に思念が向く場合は、第六実験の例外としての第八実験が意味を持つてくる。つまり、サービスの享受主体である自我からサービスの供給者である他者に思惟が移ると、 $= \begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix}$  から  $= \begin{bmatrix} l \\ 0 \end{bmatrix}$  へ、つまり、自負から愛情への送致が起こる。

旅館やホテルは宿泊の便宜を提供することが基本的な機能である。しかし多くの場合、顧客はそれに加えてある種のホスピタリティを求めることが多く、また、旅館側にとってもホスピタリティの提供が業務の視野の中に入っ

23 所有とは「正義と道徳的公正の法則に触れることなくその個人にその事物の自由な利用と所有を許し、他の個人に対してそれを禁じることができるといふ個人と個人の関係」(2・1・10)である。

ている。とはいえ、そのホスピタリティは親しい友人に対するものでは決してない。つまり、召使や旅館の行為はあくまで業務として、つまり賃金や利潤（あるいは評判を通じた将来の利潤）を獲得するための行為であり、よ

て顧客はそれを有徳な行為とみなすことはない。すなわち  $\begin{bmatrix} l \\ 0 \end{bmatrix}$  から  $\begin{bmatrix} p \\ 0 \end{bmatrix}$  へ送致が起こることはない<sup>24</sup>。つまり、ホスピタリティはそれが利潤の獲得にとって合目的であるから、経営上のキーワードとして存立し、個人にとっても効用の獲得と合致するから判断の基準となる。言い換えれば、このような目的性が失われれば（＝換言すれば、企業・顧客にとって役に立たないものになれば）、ホスピタリティ自体が存立しない。結局、財の消費は自負( $p$ )、サービスの消費は自負( $p$ )か愛情( $l$ )のいずれかを形成する。

## 5 交換における情緒形成

以上のように消費においては第四実験と第八実験が重要な役割を持つが、交換においては逆に第五実験および同類方向の原理(共感)が重要な役割を演じることになる。その過程を以下に見てみよう。交換は、第一の経済主体  $d$ 、第二の経済主体  $s$  による双方向的な行為である。それぞれの情緒は以下の式によって決定される。

$$\begin{pmatrix} p^d & l^s \\ h^d & ha^s \end{pmatrix} \begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} (r \ s) \quad d \dots\dots\dots (7)$$

$$\begin{pmatrix} p^s & l^d \\ h^s & ha^d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} (r \ s) \quad s \dots\dots\dots (8)$$

24 つまり第五実験に該当しない。送致が起こらないということは、生産者の思惟が消費者に向かわないということの意味する。これはスミスが論じた生産者（企業）の行動原理に繋がるものであるが、ヒュームも同様の趣旨の記述を残している。すなわち「（公共の利益は）あまりに世間離れし、かつ崇高であり、公衆に影響を与えることはできない。つまり、公共の利益は私的な利益に逆らって作用することはできない。」(3・2・1)。

(7)は経済主体  $d$  の情緒を表す。経済主体  $d$  から見れば経済主体  $s$  は他者であるから、自負・自卑には添え字  $d$ 、愛情・憎悪には添え字  $s$  が付されている。(8)も同様である。

経済主体  $d$  の情緒は以下のように決まる。彼は不要な財を保有しているから、

$\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  かつ  $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  から  $d = \begin{bmatrix} 0 \\ h^d \end{bmatrix}$  となる。同時に自分にとって必要な

財を誰が保有しているかわからないから(自分でもないし誰かも知らない)、

$\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  かつ  $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  から  $d = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix}$  となる。経済主体  $d$  の当初の状況は、

$$d = \begin{bmatrix} 0 \\ h^d \end{bmatrix} \text{ かつ } d = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix} \dots\dots\dots(9)$$

である。第一の情緒が保有する不要な財に関する情緒、第二の関係は必要とする財に関する情緒である。

ここで何らかの理由で、経済主体  $d$  が必要な財を所有する経済主体  $s$  の存在を知ったとしよう。経済主体  $d$  の思念は他者である経済主体  $s$  に向かう。

すなわち、 $\begin{pmatrix} m \\ n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  かつ  $\begin{pmatrix} r \\ s \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}$  から  $d = \begin{bmatrix} l^s \\ 0 \end{bmatrix}$  が形成され、経済主体  $d$

の状況は(7)から次の(8)に変化する。

$$d = \begin{bmatrix} 0 \\ h^d \end{bmatrix} \text{ かつ } d = \begin{bmatrix} l^s \\ 0 \end{bmatrix} \dots\dots\dots(10)$$

経済主体  $s$  も同様の過程により次のような状況となるが、これはちょうど(7)と対称的である。これが欲望の二重の一致と呼ばれる状況に相当する。

$$s = \begin{bmatrix} 0 \\ h^s \end{bmatrix} \text{ かつ } s = \begin{bmatrix} l^d \\ 0 \end{bmatrix} \dots\dots\dots(11)$$

さて、ここで各経済主体が相互に相手の存在を認識できれば、単に不要な財と必要な財を移動させればよい。そうした状況を指して我々は交換と呼ぶ。

しかし、問題はこの二人がそうした行動を取る時、どのような情緒形成が行われるのかである。これを考える鍵が共感に他ならない。

なぜ我々は自分が欲するが所有しない財を持つ他者に対して共感を持ちうるのか。ただ単に他者の財を欲するだけであれば略奪によればよい。実際、自分は持っていないが他者は持っているという状況が略奪を生じやすいことをヒュームは次のように論じる。すなわち「我々は事物の価値をその本質的な価値から判断することはほとんどない。むしろ他の事物との比較から形成する。…我々は他者の幸福や不幸の大小を観察するのに応じて、自分自身の禍福を判断する。…他者の不幸は自分自身により活き活きとした幸福の観念をもたらし、他者の幸福は自分の不幸の観念をもたらす。」(2・2・8)。他者が多くを所有することによって自分の不幸を(相対的に)知ることが略奪を引き起こす契機となることは十分ありうる。問題は、同じ状況から出発するにもかかわらず、なぜ略奪ではなく交換という双務的過程を選択する動機を持つのかである。

ヒュームの議論に沿って交換を解釈してみよう。人間は「自分自身を維持するために必要な食糧が、それらを探しうる(人間の能力の)限界を超えている」(3.2.2)という希少性に常に脅かされている。しかし社会を作れば、「一人一人に能力を結合させ、…分業によって…相互扶助によって…運命や偶然からの影響」(3・2・2)を小さくできる。このため、「財貨を獲得しそれらを楽しむこと」(3.2.2)は人間の幸福を増大させる。ところが、人間は必要な財貨すべてを占有できない。換言すれば、他者が持つ財が「自分自身にサービスを提供する…(ことを感知し)…他者の富から我々が利益を得ることを見出す」(2・2・5)だろう。しかし、だからといって見知らぬ人に自ら所有する財貨を提供できるほど「人間の仁愛は強くはない。むしろ逆に、財貨を多く持てば持つほど自分自身の欲求を満たす能力が高いことを知れば、帰って財貨への貪欲さが増す」(3・2・2)。反面、財貨を所有すれば幸福が増すことを理解していれば、逆に財貨を奪われた時の不便さも理解できる。ここ

に至って、人間は財貨の安定的所有の維持というもて、必要な財貨の調達のための方策としての交換にたどりつくのである。

自分にとって必要だが所有していない財を持つ「(裕福な)他者」に心が向かう時は、「財の所有者のその心情に入って」いくことによって共感を持つ。なぜなら財の所有者にとって「自身が力能(=事物を利用する力)を持っている時、他者がその力能を持っていることを想像する時よりも、より強く心が事物へ接近する」(2・2・5)。つまり、財を支配することによる快情緒である。同時に、相手にとって必要だが相手は所有しない財を持つ自分に対して、相手は対称的に快情緒を得ている。つまり両者とも自分の財を安定的に所有するゆえに、相手が自分に対してどのような情緒を持つのかを推し量ることができる。両者が「所有物から得る快は、これを観察する人(=交換の相手方)の上に投げかけられ、快と尊敬を引き起こす。(当事者は)この感情を再度受け入れ、共感し、彼自身の快を増加させる。さらにもう一度観察者に反映され、観察者の快と尊敬の基盤となる」(2・2・5)。要するに、相手が自分の財を欲するという状況が共感の前提となる。

以上の記述を形式的に示そう。経済主体  $d$  にとって、経済主体  $s$  が自分が必要とする財を持っていることによって(8)に従い愛情を抱く。それは言い換えれば相手と交換を行えば自分の所有するところとなる。つまり、(3)で示したように、ここで思惟は再び自我に向かい、

$$\begin{pmatrix} p^d & l^s \\ h^d & ha^s \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} (1 \ 0) = \begin{bmatrix} l^s \\ 0 \end{bmatrix} \text{ から } \begin{pmatrix} p^d & l^s \\ h^d & ha^s \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} (1 \ 0) = \begin{bmatrix} p^d \\ 0 \end{bmatrix} \dots\dots\dots (12)$$

となる。さらに、必要な財を所有していないという自分と、それを所有するという意味で「(裕福な)他者」の比較によって、共感の作用が働き、

$$\begin{bmatrix} p^d \\ 0 \end{bmatrix} (\bar{r} \ \bar{s}) = \begin{bmatrix} p^d \bar{r} \\ 0 \end{bmatrix} \dots\dots\dots (13)$$

が帰結する。(12)(13)は先の(4)(5)に対応している。対称的な状況が経済主体  $s$  にも生じ、



た環境に当事者が置かれていることが必要である。相互に欲し欲されているという状況はそれが市場取引を引き起こす契機であるが、両者をして相手の状況に自我を接近させるに十分であろう。逆に、まったく異なる状況に置かれた時にはこうした誘因は生まれにくい。なぜなら「大きな不均衡は関係を断絶させ、…比較の効果を減少させる」(2・2・8)からである。このときは観念間の関係が生まれにくく、共感や送致も起こりにくくなる。市場は、財と財の交換の連鎖の抽象であり、市場が人々を交換に向かわせるわけではない。それは持つ者と持たない者、欲する者と求められる者の間に生じる共感に基づく交感である。

しかし、これは交換がなされるだろう状況を作り出すまでの過程についての議論であり、ここから実際に交換という行為に移行するには別個の要因が必要である。交換の「意志が他者との関係を作り出すには、言葉かシンボルによって（意思が）表示されなければならない。」(3・2・5)。また、交換は相互に義務を課す社会的行為であるから、結局、交換をすべて理解するには社会・義務・契約・所有など交換に付随して生じる種々の問題を総合して考察する必要がある。これらの問題は『人性論』第三編で扱われており、以後、われわれの考究はそこに向かって進められることになる。

#### 参 考 文 献

- Bunhan, J., 2007, *Adam Smith and the pursuit of perfect liberty*, Profile Books
- Diaye, M., Lapidus, A., 2005, "Why rationality may be a consequence of Hume's theory of choice?" *European Journal of the History of Economic Thought*, Vol.12, no.1
- Lealdano, L., 2002, "The Passions, Character, and the Self in Hume" *Hume Studies*, Vol. 28, no.2
- Porter, R., 2001, "*The Enlightenment*", *Studies in European History* (2<sup>nd</sup> edition), Palgrave
- Rorty, A.O., 1993, "From Passions to Sentiments: The Structure of Hume's Treatise," *History of Philosophy Quarterly*, 10

Schmitter, A., M., 2010, " Hume on the emotions ", in *17<sup>th</sup> and 18<sup>th</sup> Century Theories of Emotions*, Stanford Encyclopedia of Philosophy(<http://plato.stanford.edu/>)

古賀勝次郎, 1999, 『ヒューム 社会科学の基礎』, 行人社

坂本達哉, 2005, ヒュームにおける社会科学の生誕, 『ヒューム読本』(法政大学出版会, 2005) 所収

島内明文, 2005, 「正義と効用 - スミスとヒュームの正義論の検討 - 」, 『イギリス哲学研究』第28号, 47-61

スティーブン, L., 1969, 『十八世紀イギリス思想史(中)』(中野好之訳), 筑摩書房

ラッセル, B., 2005, 『哲学入門』(高村夏樹訳), ちくま学芸文庫